

日本気象学会『天気』編集委員会 様

2010年9月13日

近藤邦明、槌田敦

すでに連絡しておりますが、2008年4月28日に提出しました論文の後半部分を査読者のコメントなどを参考にし、書き改めましたので提出いたします。

これにより、査読指針(「査読制度に関する編集委員会の考え方と指針」)にあります主な審査対象の4項目は解決したと思いますので、掲載をお認めいただきたく存じます。

また、査読者の2回目のコメント(2008年11月12日)の一部については、査読指針にありますように、査読意見に従わない場合として、以下のように査読者への回答をいたします。これは、場合によっては、この査読者の参考意見を短報の掲載という方法で解決していただくようお願いいたします。

査読者Aのコメントに対する回答

冒頭部分

本稿(改定稿)の「考察」部分について、「考察部分の記述を大幅に増やしていることは評価できる」としていただいたことに感謝しています。

コメント1

「発見した事実」について、「図4の記述の必要性は低い」などとする外は、著者らの発見した事実を認めていただいたことにも感謝しています。

「1/4周期遅れの議論は不要」について、著者らは、これを考えることによって、「気温高が原因でCO₂濃度増は結果」を推理することが可能になったので、著者らは必須の議論と考えています。

コメント2

本文中の「考察」③で回答しました。

コメント3

本文中の「考察」③で回答しました。

コメント4

本文中の「理論的欠陥」①で回答しました。

なお、査読者Aは「何でも7ppm」とされますが、正しくは「何でも3.3年分(滞留年数)」です。年間放出量が違えば、ppmの値は異なります。

コメント5

査読者Aのコメントにあります「施肥効果説や気温上昇活性化説」のような細かい参考意見は本稿の趣旨を超えます。森林破壊や農地の砂漠化に比べて、これらの効果が上回るとは考えられません。上回るというのであれば、査読指針にありますように、査読者による短報の掲載で解決していただきたく存じます。

コメント6

査読者Aのコメント5と同様に、「分別係数」というような参考意見は本稿の趣旨を超えます。また、この問題も滞留年数(3.3年)と関係し、分別係数の効果とせめぎ合い、ますます複雑になりますので、本稿の範囲を超えます。

したがいまして、やはり査読者による短報の掲載という方法で解決していただきたく存じます。

コメント7

「CO₂による温暖化の議論になってしまっている」というコメントですが、この文節は「CO₂温暖化説の理論的欠陥」を議論することを目的にしています。

コメント8

本稿の目的は、CO₂濃度増が自然現象か否か、を論ずることです。これを超える議論は今後の検討としたいと思っています。

コメント9

コメント3で述べましたように本文中「考察」③で回答しました。

コメント9の追記部分(コメント2~9)

これらのコメントは、すべて改定論文の「考察」の部分でありまして、1.はじめに、2気温変化率と大気中CO₂濃度変化率の因果関係、3.気温そのものと大気中CO₂濃度変化率の因果関係については、査読者Aに了解されたと理解していました。

また、査読者Aは、「改定に時間を要するようであれば再投稿する選択もあると思う」とのことで、認められた前半部分(1~3)を論文(Ⅰ)として提出し、時間をおいて後半部分を論文(Ⅱ)として、提出することにしました。この論文(Ⅰ)の掲載が拒否され裁判になったのでした。

ところで、この高裁判決は、この事情を無視し、その判決理由に、この「4.考察」の部分に関する査読者Aの記述を引用して、「控訴人の主張は採用することができない」としました。(判決文p8、5行目からp10、1行目)。これは、提訴していない論文(Ⅱ)(改定論文の後半部分)に関する評価であり、提訴した論文(Ⅰ)の不採用の当否には関係がありません。高裁判決は見当違いの判決でした。

コメント10

引用文献について、炭素循環に関する議論には深入りしないのですから、引用文献の追記は必要がないと思います。

コメント11

「物理学会の記述は不必要」について、この「CO₂濃度の増えない気温」という考え方の最初の発表は、掲載されなかった物理学会誌への投稿ですから、物理学会誌でのやりとりを述べる必要が生じています。

査読者Bのコメントへの回答

コメント1、2、3

これは、投稿論文の前半部分で、すでにお答えしていると思います。

コメント4

本文中「理論的欠陥」①で述べました。

コメント5、6

人為的CO₂温暖化説の矛盾に関する議論ですが、詳しい議論が必要ならば、「査読指針」に沿って査読者Bにより短報として反論していただきたく存じます。

コメント7

「歴史的」ということばを「過去の」ということばに置き換えました。

コメント8

査読者Aへの回答(コメント6)を参照してください。

コメント9

引用した遠藤論文を参照していただきたく存じます。

コメント10

大気における温暖化効果は、水蒸気が圧倒的です。したがって、水蒸気の効果をまず考えてから、CO₂の効果で補正するのが、物理学的摂動論という正しい方法です。これを逆にして、効果の小さいCO₂をまず考えて、これを効果の大きい水蒸気で補正すると、間違えた結果を得ることになります。

しかし、これらの問題を論ずることは、本論文の範囲の外と考えます。そこで、「査読指針」にありますように、査読者Bによる短報の掲載で問題提起していただけないでしょうか。それにはやはり短報でお答えすることになります。

語句などの問題について

- ・「温暖化効果」 通説では「温室効果」といいますが、これは間違った表現です。著者は物理学者のひとりとして、このような間違った表現をとることはできません。
- ・「雲の効果」 水蒸気の変態ですから、当然議論しなくてはなりません。
- ・「水蒸気効果」 フィードバックという間接効果ばかりでなく、直接の効果そのものが問題となります。これが人為的CO₂温暖化説には抜けているのです。
- ・「加圧された水蒸気の効果」 薄い気体は光学的に線スペクトルです。濃い気体では分子間作用によって帯スペクトルになります。さらに加圧され、分子間化合物になると、連続スペクトルになります。これは物理学的に常識ですから引用の必要はありません。

青い空が白くなると、水蒸気は、分子間化合物として大きくなり、 0.8μ 以上の水滴に近くなっていますから、連続スペクトルとなって CO_2 の出番はありません。

・エアロゾルの問題はご指摘の通りです。

コメント11

文献の欠落の指摘 ありがとうございます。

コメント12

文献の誤記の指摘 ありがとうございます。